

保育素材としての土粘土について（２）

…保育現場でできるテラコッタ…

佐藤 智朗

（山口芸術短期大学・幼児教育科）

1. はじめに

子どもの時代には、子どもの時代にしかできない活動、しなくてはいけない大事な活動が沢山ある。見栄えなど気にせず、イメージを広げながら表現していく活動、素材とぶつかり合いながら、素材から刺激を受けたり、素材と対話したり、素材を征服したりして、ものを創造していく活動である。子ども達は、自らの体を道具として、直接いろいろなものを作り出していく、その時に必要な相手、つまり、保育素材は、子ども達を引き付ける魅力を持っていなければならない。また、子ども達がイメージを、豊かに表現できるような可塑性を、有していなければならない。さらには、適度の抵抗感を子ども達に与え、新たな活動やイメージを生み出すことができるものでなくてはならない。最も適している保育素材に、土粘土が上げられるのではないだろうか。土粘土は、子どもの皮膚に馴染み、子ども達と出会うことで様々な表情を見せる。硬くなったり軟らかくなったり、へこんだり伸びたりする。また、立体表現も、平面表現もでき、作ったもので遊ぶこともできる。さらに、焼くことにより、土と火から新しいものが生まれ、半永久的に保存ができるようになる。この様に、保育素材としての土粘土は、他の素材にない幅広い顔を持っているといえる。他の活動においては、集中力や持続力がなかった子どもが、粘土と出会ったことで、表現が変わり、集中力や持続力がついたという例もある。しかしながら、ほとんどの保育現場で使用されていないのが現状である。保育効果が、すぐに目に見える形で、現れてくるものを望む保育現場が多いのではないだろうか。また、土粘土の保育素材としての重要性は認識していても、管理や準備・後片付けが大変な上、作品として残せないという理由から、描画材などに偏った造形活動になっているのではないだろうか。そこで、作品として残す方法を、保育の現場に提供することにより、土粘土が保育素材として取り上げられるようになるのではないかと、疑っては、土粘土の普及に繋がるのではないかと考えた。また、現代の子ども達は、火と土との関係を、まったくといってよいほど知らないで、人間の文化として土粘土を焼くという経験をさせることは、意味のある活動となるのではないかと考えた。

それでは、保育の現場で土粘土を焼くことが可能であろうか。もちろん、釉薬をかけて焼くといった本格的な焼き方をするためには、それなりの窯が必要であり、現実問題として、コストの面などから不可能である。しかし、素焼きまでの、いわゆるテラコッタに関しては、焼き方により、十分保育の現場で可能なのではないだろうか。本稿では、保育現場、及び保育者養成機関における実践をもとに土粘土の焼き方、及び焼くという活動に至る保育の流れや方法を考察する。特に、焼き方に関しては、できるだけ簡単にかつ、安価にできる方法を考察したい。

2. 方法

焼き方	主な燃料	粘土の種類
野焼き	藁・材木	テラコッタ
野焼き	藁・籾殻・材木	テラコッタ
野焼き	藁・材木	テラ・80/100陶土
七輪	木炭	テラ・120目陶土
七輪	木炭・豆炭	80目陶土
石油缶	木炭・豆炭	80目陶土
石油缶	練炭	100目陶土
焼却炉	材木	テラコッタ
耐火煉瓦窯	藁・籾殻・材木	テラコッタ
耐火煉瓦窯	藁・木材	テラコッタ

上記の方法で、焼き方について考察した。なお、作品制作者は、A 保育園（2～5歳児）、B 保育園（4～5歳児）、C 幼稚園（4～5歳児）、及びD 保育者養成校（2年生）、E 児童館（小学3年生）である。

3. 結果及び考察

いずれの焼き方においても、作品の大きさや形・量燃料などの条件により、焼き上がりに多少の差はあるが、素焼きは十分可能である。中でも子ども達の参加という面から見ると、野焼きが最も望ましい。しかし天候や場所の面などに制約もある。他の焼き方においては、大人だけで焼いてしまうのではなく、せめて子ども達の見ている前で、なおかつ、子ども達が窯の熱を感じられる中で焼いて欲しい。そして、窯から出す瞬間の緊張感や感動は、是非子ども達と共有して欲しいものである。

(1) 保育の方法

①素焼きに結び付く活動の流れ

焼くという活動に結び付く活動の流れには、次の3つが考えられる。

- a. 土粘土遊びの中で、子ども達が作品を残したいと思った場合に、そして、それで遊んだり、飾ったりしたいと思った場合に、焼くという活動を行なう。
- b. 土粘土遊びを行なう過程において、意欲付けに焼くという活動を体験させ、その上で焼くという目標を持った活動を行なう。
- c. 保育者の側が、焼くことを前提に題材・テーマ・技法を与えて活動を行なう。

望ましい流れとしては、aもしくはbのようなものである。砂や水、どろんこ遊びを十分経験し、また、描画遊びや工作遊びの経験などと平行して、土粘土という可塑性素材を使った遊びを十分行ない、その中で技法など子どもなりに習得した上で行なわれる活動が望ましい。始めは、保育者の側から焼くという活動を子ども達に提供し、次にその経験をもとに子ども達主体の野焼きを行ないたい。

②制作の方法

作り方としては、一気に作ったもの、そして細かい点や表面ばかりにとらわれない、大胆な表現がなされたものが望ましい。

(2) 焼き方

①野焼き

窯は作らず、藁や材木を主な燃料とした、最も原始的な焼き方である。子ども達と共に焼き上げることができるという利点がある。また、大きな作品を焼くことが可能であり、偶然の焼きむらなど面白い焼き上がりも期待できる。しかし、天候や場所などにより左右されることと、熱効率が悪いために燃料がたくさん必要であること、煙などを多く出すために住宅密集地ではできないなど問題点もある。

②七輪焼き

最も手軽で、燃料の要らない焼き方である。素焼き鉢と組み合わせたり、ブリキのバケツや芋焼き器などと組み合わせたりすることでも焼ける。燃料は、炭を使う。ほとんど煙も出ず、時間的にも短時間で焼くことができる。ただし、子ども達の参加は、ほとんど不可能である。また、小さな作品しか焼くことができないこと、量的に沢山焼けないことなど問題点もある。しかし、逆に少しずつ、子ども達の要望に沿って焼くことが可能である。

③18リットルの石油缶焼き

七輪の代わりに18リットルの石油缶を使う焼き方である。熱が外に逃げ易く、七輪焼きに比べ燃料が多くいることと、空気管理(熱管理)が難しいことが上げられる。しかし、窯に必要な経費はほとんどなく、手軽に焼くことができる。また、七輪焼きに比べ多くの作品を焼くことができる。

④焼却炉利用の焼き方

材木を主な燃料として焼く方法である。子ども達の参加はある程度可能であるが、材木の燃やし方、特に温度管理が難しく、破損の確率が高い。

⑤耐火煉瓦を利用した窯による焼き方

ある程度の量を定期的に焼く場合には、耐火煉瓦を使って、簡易窯を作っておけばよい。ただし、窯の設計や焼き方などに、ある程度専門的な知識が必要となる。また、耐火煉瓦は、野焼きに利用したり、七輪焼きのような使い方も可能である。

4. まとめと今後の課題

よく子どもの活動は、結果よりも過程が大切であるといわれるが、過程において子ども主体の活動が行なわれれば、必然的に結果も大切なものとなるはずである。また、大人は、作品を結果ととらえて、活動を終わろうとするが、子どもは、その作品で遊んだり、飾ったりすることで活動を持続している場合が多い。また、次への活動へ結び付く場合も多い。しかし、土粘土を使った活動の場合、子ども達に作ったものを残しておきたい、そして、それで遊んだり、飾ったりしたいという気持ちが芽生えて来ても、そのままでは壊れてしまい、活動が停滞してしまう。子ども達の気持ちを大切に、次への活動に結び付けるためには、焼くという活動が重要な意味を持つてくる。また、子ども達は、一度焼くという活動を体験すると、活動に目標が生まれ、新たな創造活動に繋がるようである。

しかしながら、いうまでもなく、土粘土の遊びの中で重要な位置にあるのは、作品を作ることでもなく、焼くということでもない。子ども達が主体的にものを作ったり壊したり繰り返す中で、いろいろな遊びを考え出したり、自分のイメージを土粘土という素材に込めて、表現して行くという活動が、大切なのである。したがって、大人主導の作品作りを子ども達に押し付けたり、大人が満足するために、焼くという活動を取り上げてはならない。

今後の課題として、土粘土の保育効果を、焼くという活動を含めて考察すると共に、未満児から年長児までの活動の流れについても考察したい。